

## 平成28年度第1回清瀬市総合教育会議

平成28年度第1回清瀬市総合教育会議が平成28年5月26日午後1時30分に招集された。出席委員、議事の概要は次のとおり。

- 1 日 時 平成28年5月26日（木） 午後1時30分から
- 2 場 所 清瀬市役所第2委員会室
- 3 出席者 渋谷 金太郎（清瀬市長）  
坂田 篤（清瀬市教育委員会教育長）  
宮川 保之（教育長職務代理者）  
稲田 瑞穂（教育委員）  
植松 紀子（教育委員）
- 4 オブザーバー 小保内 俊雅（多摩北部医療センター 小児科部長）  
齊藤 しのぶ（清瀬第三小学校学校支援地域本部コーディネーター）
- 5 事務局 今村 広司（企画部長）  
南澤 志公（企画課長）  
粕谷 勝（教育総務課長）
- 6 書 記 小林 真吾（教育総務課庶務係長）  
小山 涼子（企画部企画課）

企画課長：皆さま、こんにちは。定刻になりましたので、これより平成 28 年度の第 1 回目の清瀬市総合教育会議を開催いたします。なお、本日、粕谷委員におかれましては、所要のためご欠席というご連絡を受けております。それでは、この後の進行は、市長よろしくお願いたします。

渋谷市長：はい。少人数ですから、座ったままでいいですかね。まず、お集りいただきまして、ありがとうございます。前回の会議では、清瀬市教育大綱を議論してもらったわけですが、市が掲げる「手をつなぎ心をつむぐみどりの清瀬」の基本理念を、教育の側面から具現化を目指していくものです。これはいずれも実行計画を伴っておりますので、事業について一定期間の見直しを図りながら、計画の実現性・実効性の精度をより高めていきます。

それで、今日は皆さんと議論させていただくのは、地域との協働についてであります。子供たちが健やかに育つためには、地域の力が当然必要です。その力が集まる場所として、昔から学校の存在は大変に大きなものがあります。そして、子供たちの力を最大限に伸ばす学校教育を実践するには、さまざまな人材の宝庫である地域が、積極的に学校の運営に関わっていくことが大事であります。そのためには、地域の人たちが学校への関心を高め、積極的な支援者になっていただくことが必要であるとともに、学校も積極的に地域に開かれ、地域の教育資源を教育に生かせる仕組みを作っていくことが求められております。私が喜びを持ちながら目撃しておりますところでは、まず清明ソーランであります。あれは 6 人・7 人のお母さんたちのグループが学校の体育館を借りて、4 年生・5 年生・6 年生たちに約 2 カ月前から指導を展開して実施しております。それで、発表の場は 400 人ぐらいが取り囲んで、子供たちは 6 年生・5 年生・4 年生ですけども、心を 1 つにしているから、音楽が聞こえなくても動きが一体化していて、やり終わった瞬間に皆が「わー」と拍手してくれるので、「何でこんなのを」というような気持ちでやっている子は、見渡す限り 1 人もいなくて、あれは本当に素晴らしいと思いました。地域との連携の 1 つの大きな材料だろうと思います。

それから清瀬小学校では、清瀬小学校創立 100 周年を機会に確か生まれたと思うのですが、中里の火の花祭と同時に火の花盆踊り大会をやるのですけれども、その準備に清瀬小学校のお母さんたちが手伝ってくれています。盆踊りの会場に飾る花を作ったり、当日は子供たちにおみやげを渡すような所を担当してくれたり、そして、片付けもやってくれたり、4 回から 5 回地域に関与しています。清瀬小学校でもそういったことを通しながら、私が目撃している所では地域とのつながりを深めているということでもあります。

あと清瀬第六小学校などは、「うめのたけまつり」を行っています。これも学校が場所を開放したり、先生たちが関与したり、子供たちも集まったり、親も来たりといった所で、そういうことがあります。

青少年問題協議会でも、清瀬第七小学校では体育館で清瀬第二中学校のブラスバンドを呼んだり、清瀬第七小学校の子供たちの何かちょっとしたことをやったりとか、そういう

のを親たちが、地域の人たちが集まってやっています。

それから他には、まだ見たことはないですが、清瀬第六小学校ではプロジェクト X がやっているサバイバルキャンプをやっていますし、そして、清瀬高校では、防災マップを作るために、やっぱり地域の人たちと高校生が街歩きをして防災マップ作りをして、防災訓練を兼ねて清瀬高校に合宿したりしていて、特に高校生レベルでは着々と結束力を高めてきてくれているのではないかというような思いがあります。取りあえず、そういう具体例をご紹介申し上げながら、今日はオブザーバーに来ていただいております。多摩北部医療センターの小保内先生と、清瀬第三小学校学校支援本部の斎藤先生にご出席いただきました。もう1人。

斎藤：支援本部で一緒にやっている茂木さんです。

渋谷市長：では、それぞれのお立場から、学校と地域の連携をテーマにしながら、活発な意見交換をしたいと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。教育長に司会をお願いします。

坂田教育長：はい。それでは私が市長の命を受けまして、司会を務めさせていただきます、教育長の坂田でございます。よろしく願いいたします。今日は市長から今ごあいさつをいただいたとおり、地域との協働について議論をしていきたいというふうに思います。この議論のテーマを設定した理由でございますけれども、ご存じのとおり子供たちの中にはいじめや不登校等、指導上の課題を抱える子供がたくさんおります。また社会に目を転じますと、虐待であったり貧困であったり、そういうような福祉的な課題を抱える子供、もしくは発達障害などの医療的な課題を抱えている子供、また友人関係とか家族関係の悩み、親子関係の悩み等々の心理的な課題を抱えている子供たち、さまざま課題を子供たちは抱えて今生活をしているところでございます。またそれとともに、保護者にもいろいろな苦勞がのしかかっているところでございます。家庭の貧困であったり、心理的な疾病を抱える親の増加であったり、またそれらを背景とした子供・親子関係の複雑化であったり、家庭の孤立化であったり、本当に多くの課題が今子供たちを取り巻いているところでございます。そういうような環境の変化が子供たちの学力向上を阻害していたり、また生活指導上の課題を誘発していたり、それが深刻化することで子供が尊い命を失ってしまうというような最悪の事態につながっているケースも幾つかございます。

こういう課題に対して、これまで学校はさまざまな役割や期待を担ってまいりました。このようないわゆる際限なき学校への期待というものが学校の多忙化を生み出して、負担の増加によって機能まひを今学校は起こしつつあります。この問題を解決していくためには、専門家を含めた地域との連携協働がどうしても必要であろうということであります。

文部科学省もようやくそのことに気付き始めまして、「チーム学校」という概念を提示しました。これは学校と家庭と専門家が、地域と連携協働して、ともに子供を成長させていこうという理念でございますけれども。これを進めることによって、教員が本来の教育活動に重点を置いて取り組めるようになり、子供と向き合う時間も増えるようになります。

また活動を支える地域住民にとっても、ネットワークが広がって、地域のコミュニティーの活性化にもつながっていきます。一方で学校以外の社会教育施設、いわゆる博物館であったり図書館であったり、ここにおいても市民との協働が進むことで、郷土に対する思いや意識の高まりが見られるようになるはずです。そして、自己肯定感や自己有用感が生まれて、結果的に健康都市の実現も図られるであろうというふうに、ここでは仮説をしております。

清瀬の目指すまちづくりを実現するためには、教育委員会と市長部局との連携がどうしても必要でございますので、そのことで今回の総合教育会議のテーマといたしました。このテーマ設定について、何かご質問等があれば受けさせていただきます。いかがでございますでしょうか。よろしいですか。それでは、今の問題意識に基づきまして、今日は大きく分けて 2 点、まずせっかくオブザーバーとして小保内部長に来ていただいておりますので、教育機関と医療との連携というものの今後について議論をしてみたいと思います。

今日は先ほどもご紹介いただきました、多摩北部医療センターの小保内小児科部長に来ていただきまして、オブザーバーとしてご参加いただき、医療との連携の今後についてお話をいただきますが、小保内部長には毎年アレルギー検診で講師を受けていただいております。またこの種の医療的なケアが必要な子供たちに対しては非常に積極的に、また熱く支援をいただいているところでございます。より一層連携を深めるために、今回は「教育と医療の連携協議会」というものを立ち上げました。その実態、もしくは背景について、小保内部長からまずご説明をいただければと存じます。よろしく願いいたします。

小保内小児科部長：皆さま、こんにちは。暑いので上着は脱がさせていただきます。今日は教育長の坂田先生から今お話がありました、医療と教育の連携ということでお話をさせていただきます。清瀬市のみならず近隣各市から、不登校であるとかいろいろなお子さんが当院に関わってきます。そういう中で、お子さんの病状とか対応について、学校に僕らが情報を出しても、学校からのレスポンスがなかなかないというようなことが、非常に僕らの中では大きな疑問であったり、「どうしたらいいのかな」というのが分からなくなったりというような中で、教育長がまだ教育長になれる前に、一度そんな話をしたことがあります。そんな中で、学校は医療機関とどう関わっていいのかというのが、あんまりよく分からないというようなことも分かりましたし、僕らが学校を実は全く理解していないというわけではないけど、理解していないという部分が非常に多いなとということが分かってきたわけでありまして。「では、どうしましょうか。」という中で考え出したのが、この「学校医を学校のかかりつけ医に」というプロジェクトでございます。

教育の現状と問題点ですけれども、皆さんもご存じのように、近年発達障害というのが非常に大きな問題になってきましたし、不登校、それから自殺の低年齢化、いじめといったような、非常に大きな問題がございます。これは、もう学校だけでは解決できない状況となっています。例えば不登校 1 つ取っても、今お話があったように、例えば身体的な問題で学校に行けない子もいます。それから精神的な問題で行けない子もいます。社会的な問

題で行けない子もいます。またそれが複合的な問題になっている子もいます。しかし、今学校では、全て一緒くたにしてカウンセラーをお願いするところになっていて、そのために問題が解決できずに長期化してしまったり、もっと複雑になってしまったりというものを、僕らはよくよく目にしています。

では、それは医療だけができるのかというと、そうではありません。社会問題を抱えている人たちには、行政とかいろんなものが関わってこななければできません。ですから、多職種で何とか地域の中でその子供たちを支えていかなければいけない、そういったチームを作っていこうという考えと、文科省が提示した「チーム学校」という中の考えが、一致したということで考え出したプロジェクトでございます。僕らは医療なので、医療と教育がきちんと連携を取らないといけません。これが根本だと、僕は思っています。というのは、医療は何を見るかといったら、発育・発達を見ているわけです。学校というのは、発育・発達をより素晴らしいものにしていくのが学校です。僕らはその発育・発達ができる基本を作るのが、医者の仕事というふうに考えると、子供たちを地域で伸ばしていくためには、車の両輪のような最もベースになる所が医療と教育というふうなものだと考えられるわけでありまして。文部科学省をはじめとして、社会のニーズとしては、チーム学校で教育支援をしてみましよう。これはどういうことかといいますが、今まで話したようなことなのですが、1番の問題は文科省の中に医療が入るポジションがないのです。医療に対しての認識がないという所に、大きな教育関係の課題がございます。ですから、教育長と話して、「車の両輪なのだから、基礎的なきちんとしたポジションを作りましようよ」という所から始まってございます。

もう一方で、小児医療に対する社会のニーズというのは、非常に大きく変わってきてございます。1つは予防接種など予防医学が進んだことで、それからまた家庭の環境とか衛生環境が非常に良くなったので、重症の感染症はいなくなりました。昔は12月から3月までは小児科の天下というぐらい非常に多く、肺炎や髄膜炎だということに家に帰れないなどということもありましたけど、それは僕が医者になって3年目・4年目ぐらいまでのことで、今はそういうことはほとんどないという状況です。

もう1つ社会の規範だとか生活様式が多様化してしまっていますから、各家庭によって全然考え方が違って、「今までどおり、こういうふうにやればいいよね」ということが、なかなか通じないという所があります。ですから、多職種によるチーム医療、チームに医療が積極的に参加して、学校と連携を組んでいかなければいけないということです。そういう中で、学校がどうやって医療と関わっていくかということを考えたときに、最も身近に学校に関わる医療関係者というのは学校医です。だから、学校医を何とか学校とのつなぎ役、パイプ役に使おうというのが、この考え方でありまして。学校が相談できる医療機関を、学校ごとに持つということです。例えば多摩北部医療センターがそういう存在に、それは最初に坂田先生からお願いされたのですが、坂田先生のお願いを聞いて、清瀬市だけでもかなりの数になります。僕らがカバーしている地域というのは、東村山・東久留米・

西東京・小平とありますから、「全部でいったら、ちょっと僕らだけではカバーできませんよ」となると、身近に相談できる学校医がいる、まさにこれが 1 番いいのではないかと思います。学校が医療相談を容易にできる、それからもう 1 つ重要なのは、学校が「病院に行ったらどうですか」という話をしたときに、保護者というのは「学校はそういう評価をしているのか」と思う人がいます。つまり学校というのは評価するという 1 つ大きな役割がありますから、「病院に行けという評価なのか」ということで、学校と保護者の間が非常にギクシャクしてしまいます。ところが、そこに学校医が介在すれば、学校医は医療について話をする人ですから、学校医から「君、病院に行った方がいいよ」という話があったら、これは医療的な説明も専門家ですから、よりきちんとできるので受け入れやすい、そういうことができるだろうということで、保護者の意識に医療ニーズが明確化されるわけです。もう 1 つは、評価と無関係であるということが明確化できます。だから、学校医がここに介在しないと、うまくいかないということです。

もう 1 つは最初に話しました、多数の学校ではなく身近な 1 校が学校医の役割ですから、行き届いた加療が可能になるということになるわけです。学校医の役割としましては、学校保健法の第 2 章の「学校保健」という所の第 8 条に「学校においては、児童生徒の心身の健康に関し健康相談を行うものとする」と書いてありますので、これが学校医が学校からの相談を受ける根拠になります。学校医というのは非常に失礼ですが健康診断をすることしか今はやっていません。それはなぜかということ、学校保健法ができて学校医が設立されたときの 1 番の問題は、集団感染を起こさないで学級閉鎖などが起こらないようにする、学校で集団感染を起こさないようにするというのと、戦後ですから栄養状態も悪いから発育をきちんとさせると、この 2 つだったのです。でも、こんな問題は、先ほど「小児科医の仕事は変わりましたよ、栄養は良くなりましたよ」とお話ししたとおり、この 2 つは重要なポイントではないのです。むしろ大きく変わっているのですが、学校医が今まで 10 年 1 日のごとく全く変わっていなかったという大きな問題があります。これを変革するための根拠がここにあります。「学校が児童生徒の健康状態について相談していいんだよ」という、これが根拠になります。学校から相談や心配を受けたら、医療ニーズの整理をとりあえずしましょう。とりあえずするということは、要するに「これは、より上級の病院、二次病院、三次病院に行った方がいいのか」ということをきちんと言いましょう。それから全て今学校のスクールカウンセラーに流していましたが、「これは心理的な問題ではなく、身体的な問題だよ」とか、「それよりも、この子は学習障害があるから、言語聴覚士を中心とした所に行った方がいいよね」とか、そういうことのトリアージをしてもらいます。そして、保護者への説明をしていただいた上で、教育スタッフへの適切な医療的指導をするというのが、学校医の役割となります。学校から医療へのアプローチとしては、これを通してやろうとしていることであります。学校から学校医への相談が行きます。そこで医療ニーズの整理をした上で、学校から多摩北部医療センターへ紹介していただきます。適切な医療会議がここで行われて、多摩北部医療センターからは地域の学校と学校医にフ

ィードバックをします。もしこのお子さんにかかりつけ医がある場合には、かかりつけ医にフィードバックして、かかりつけ医でフォローするというシステムを併行で持ってください。より高次医療機関、例えばここでは小児総合医療センターになりますが、そこに行っただけがいいということであれば、診療情報提供をして、そちらに行ってもらおうというような形を取っていきます。学校医を学校のかかりつけ医にするためには、清瀬市医師会は非常にびっくりするほどに協力的にやってくれています。清瀬市医師会の平野会長をはじめ、学校・市、それから中核病院が 1 つのテーブルに着いたというのは、全国的に見ても全くないことです。

渋谷市長：そうですか。

小保内小児科部長：「これは全国的に見ても全くないことだろう。これは絶対にこのテーブルは壊してはいけない。これを 1 回壊したらもう二度とこれはできないから」ということで、非常にやる気があるのですが慎重です。ですから、すぐに進むかどうか分かりません。だけど、確実に進めようということ、清瀬市医師会は言っています。これは実は東京都医師会も、これに非常に注目しています。もう 1 つ東京都の教育委員会の方にも、このプロジェクトについては少しお話が上がっておりまして、東京都教育委員会の方でも、非常にこれに関しては興味を持って見て下さっているところであります。

連携と支援をするためにテーブルを作りましょうということで「教育医療連携協議会」、これは「教医協（キョウイキョウ）」と呼んでおりますけど、教医協をまず開催しないといけないということで、第 1 回が 3 月に開催されました。

もう 1 つは、多摩北部医療センターと医療の連携の中で、1 つは教員の全員がそういうふうになってくれる必要はないのですが、学校の中にコアとなるメンバーがいて、コーディネーター的な役割をしてもらう人を作りたいと思います。そういう研修をして、コーディネーターを養成したいと考えてございます。それから、やはりこれは発達障害にしろ何にしろ、新しい概念でございますから、開業の先生たちがそういった最先端のことを皆が網羅的に勉強できているわけではございませんので、卒後研修などを充実させていきます。

それから「A 中学ではこんな症例があって、ここではこういうふうにして、こうやって、こうなったのだよ」というような症例検討を行いながら、皆で勉強していきましょうという所まで話は進んでございます。

現在の状況でございますが、第 1 回の教育医療連携協議会が開催されました。教医協設置要綱の承認、それから議長・副議長の選出・選任、それから事務局が清瀬市教育委員会ということで、事務局の承認もされました。事務局が教育委員会だけだと、医療の方とはちょっと難しいかもしれないということもありまして、多摩北部医療センターの医事課が事務局のバックアップとして付くということ、今日事務長から内諾を得てきていますので、医療の方の関係は当院の方で持たさせていただきます。第 2 回の清瀬市医師会と地域中核病院連絡協議会が開催されまして、対象をいきなりいじめから何から全部やってしまうと、あぶりは取らずになってしまうといけなから、まず不登校からやろうということに

決定しました。不登校からやる理由は、例えばA中学校で10名いた不登校者が3名減ったとか5名減ったという、3名は学校に通うようになったとかということは、きちんとした数字で見えてくるわけです。きちんとした数字で見えてくると、成果として分かります。そうすると学校の先生も「成果が上がるのだったらやろうよ」という気持ちになるし、医師会も「成果が上がったのだからもっと頑張ろう」という気になるので、成果が見える所からやろうというのが医師会からのご意見でしたので、不登校を対象とすることにしました。いきなり全部から始めるのも大変だろうから、トライ・アンド・エラーで進んでいく以上、いろんな所でエラーが起こると「これは、まずいからやめようよ」という話になるといけないから、1~2校で小学校からパイロット的に開催しようという話になってございます。

今後の課題と問題点でございますけども、教職員の意識改革をしていかななくてはいけません。医師の卒後教育を実施していかななくてはいけないのですが、これは東京都の心の診療部門の拠点病院になりました都立小児総合医療センターの副院長の田中先生が非常にこのプロジェクトに興味を持っておりまして、「全面的に支援をするからやれ」ということを僕に言ってくれました。実際には、これは最終的には市に決断していただかなければいけないんですけど、市から要請をしていただければ、東京都の心の医療プロジェクトの中に1枚加えていただけるといような話でございます。

それから、教職員体制の中でコーディネーターというものが宙ぶらりんになってはいけませんので、きちんと教育委員会も含めて、「こういう仕事をするのだよ」という根拠を確立してもらわなければなりません。これは、市にもお願いしなければならないことです。それから、医師会の医師が執務をしますので、その執務に対する補償、そういったことも少しは必要かということで、市のご理解と財政を含めた支援を、これはすぐにお金を出せということではありません。流れに乗っていく中で、少しそういった、例えば研修会をやるための費用、多分これは東京都が出してくれると思います。研修会の方は、東京都の拠点病院になっているので、あちらのお金でやれるように僕が働き掛けますけど、そういったときに、少し研修会の場所を提供するとか、そういったご協力を含めてやっていただかなければならないというふうに考えてございます。

これは全国で初めての試みで、東京都の教育委員会からは、もしこれがうまくいったら学校医の概念が変わるといふような言葉をいただいております、これを清瀬市が本当にうまくできるかどうかというところなんですけど。八王子市の関係者と話したら、八王子市は公立小中学校が100校を超えるということで、無理ということでした。清瀬市はすごく少ない校長先生たちも、清瀬のアレルギーの話とかをさせていただいているので校長先生とも顔見知りです。この間も「オー」と声を掛けていただいて、誰かと思ったら第三中の渡部校長でした。そういうぐらいに多摩北部医療センターとはそういう連携になってきましたので、清瀬市だったらできるのではないかとこのように思います。

清瀬市ができたなら東村山市・東久留米市と拡大していけばいいというのが、これは東京都医師会の考えです。ということで、清瀬市は非常に今回大きなキーポイントというか、



日本の教育と医療を大きく変える大きなポイントになっています。よろしく申し上げます。  
渋谷市長：今の話は議事録に押さえてありますね。後でしっかりもう一度勉強し直しますから。

坂田教育長：ありがとうございました。

小保内小児科部長：参考資料を持ってきてありますので、お渡ししていただけますか。

坂田教育長：後ほどまたお読みください。ありがとうございました。小保内先生が今おっしゃったように、これは本当に全国で初めてのケースです。今までは学校と医療のハードルが非常に高かったのですけれども、ここで一気にハードルが下がって、まさに医療的な観点からの連携が進んでいくと私は希望しているのですが。今のプレゼンテーションで、まずはご質問があれば受けさせていただきたいというふうに思いますが、臨床心理のお立場からいかがでしょうか。

植松教育委員：はい。私は武蔵野日赤に昔いまして、日赤病院と東京都教育委員会の方たちとスクラムを組んで、自閉症などで家庭訪問とかをやったことがあります。東京都の教育委員と主治医とが、そういう形で巡回していたことがありますが、いつの間にか消えてしまいました。あれがもう少しちゃんときちんと機能していたら良かったのにと思うのですが、消えてしまわないためには、しっかりしたものを作っていくといけないのかなと思います。あとは横浜市ではやっぱり医療と、各コーディネーターが作られているのですね。横浜市でも、かなりその部分はしっかりやっけていこうというふうに、今考えられています。清瀬市では、先生のような方たちがもう一度中心になっていただけると、すごくいいかなと思います。横浜市にもいらっしゃるのですけれども、穏やかなネットワークなので緩やかです。だから、きつときちんとした形でフラットな関係で、いわゆる平等の関係で作っていくないと、上下の関係になった途端に壊れていきそうな感じがしないでもないというふうに思います。子供が非常におりましたので、地域の方と小児保健がネットワークを作っていたので、そういう意味でも先生が主になって、そして、平等な感覚で会議をしていかないと、ずれてくる可能性があります。特に不登校の子供たちなどは、難しい問題をいっぱい抱えていますので、だからそこも絶えず連携をしていかないと難しいのかなというのが、私の意見です。

坂田教育長：ありがとうございました。

小保内小児科部長：よろしいでしょうか。

坂田教育長：はい。

小保内小児科部長：今のご意見に、1つこのプロジェクトはどこが違うかというのと、これは全部コミュニティーベースにしたということなのです。要するに東京都が武蔵野日赤と組んで広範囲に移動しても、地域から離れてしまうから駄目なのです。それで潰れてしまうのです。個々になってしまうのです。これは、個々にしないのです。学校と学校医という絶対的に地域に連綿としてあるもので、新しいものは作りません。今まであるものを使います。地域から離れないということが、このプロジェクトの1番のポイントなので、地域

がありさえすれば医師会はずっとなくなりません。例えば50年、100年変わらなく医師会は存在すると思います。

学校も同じだと思います。そういうふうに変のものでも今まであって、なおかつ将来も変わらないだろうというものをツールとして使う所に、このプロジェクトの1つのみそがあると思うのです。いろんな所のそういうプロジェクトを見ても、「誰がいたからできた」というものが多いのです。「誰が発案したか、これはお前が発案したのではないか」と言われたら、そうかもしれないですけど。僕がいなくなってもできる、つまりシステムを作るのが目標なのです。ここが大きな違いだというふうに、僕は考えています。だから、失敗しないようにいけるのではないかとというふうに考えています。それで先ほども医師会の話がありましたように、テーブルなのです、誰がいるかではないのです。そこに来て座れるテーブルを作るというのが目標なのです。そのテーブルに着く人は行政と教育機関と医師会、それから中核病院がテーブルに着く、そのテーブルを壊さないようにしようという所が、今回のプロジェクトの医師会の非常に大きなやる気というか意気込みですので、多分これは今までとは違うと思います。今まで学校巡回とか、いろんなことをやっているのですよ。多摩北部医療センターからも清瀬市を回ったりしていますし、それこそ言語聴覚士もいますし、臨床心理士もそうやって東村山とかいろいろ行っています。でも、それは違うのです。それだけでは潰れるのです。「その先生がいなくなったら、どうするの」という話になってしまうから、そうなのです。そうならないためにシステムを作るということなのです。

坂田教育長：ありがとうございました。今のキーワードが、2つあったと思います。「地域と離れない」、これはまさに今日のテーマの地域の協働という所なのですね。地域がホームベースになっているということです。地域の中の学校であるという概念ですね。その学校をいろんな機関が取り囲んでいる。今のお話は、医療という側面からそれをお話いただきました。地域から離れないというのは、1つのキーワードになっています。もう1つは、今までの地域支援と学校支援というのは、思いと願いで回ってきたのです。情意で回ってきたのです。そうではなくてシステムとして、属人的はないシステムとしてしっかりこれを構築していこうと、これが教医協であって、これからご説明いただく学校の地域支援本部でやるというようなまとめができるとういと思っております。学校関係者として稲田先生、このお話が進んできたときに、学校としての最大の課題は何でしょうか。メリットの方が大きいとは思いますが。

稲田教育委員：何を企画するにしても、はじめの一步というのは大変な勇気が要ると思うのです。よくここまでやっていらっしゃるということを知って、すごく感心したというのは失礼な言い方ですけど、素晴らしいプロジェクトだと思います。ただ、これを成功させるために学校としてというのは、課題として出ていますけれども。教員のコーディネーターをどう育てるかということが、1番重要な課題です。これはあくまでも管理職もある程度中身をしっかりと勉強しなくてはいけないし、その上に複数の教員に対してきちっと指示

したうえで、複数のコーディネーターを置くということが何よりも大事だと思います。というのは、学校でいろんなことでプロジェクトを作ったとしても、その先生がいなくなるとプロジェクトが駄目になってしまう、尻つぼみになってしまうという傾向が多いのですね。だから、そういう意味ではやっぱり教員というのは転勤がありますので、転勤のずれを考えて複数の教員を設置するというをやらないといけないと思います。まず学校の中での理解というのか、教員の支援とか協力とか、保護者のそれに対してのPRなどができる教員をいかに作るかということだと思います。これはまずは管理職にきちっとこのプロジェクトの話をしかりして、その後に教員をどういう配置でコーディネーターを作るかということだと思います。

坂田教育長：ありがとうございます。管理職の知識と理解、まずは組織リーダーである管理職が、しっかりとこれを理解した上で、推進していくというような意欲を持ってもらいたいということ。あとはまさに組織体制、これも属人ではなくて、やっぱりシステムとして、しっかりと学校の中で確立していくべきであるということですね。小保内先生、何かこのことについてご所見があればお願いいたします。

小保内小児科部長：はい。今の「学校の先生は転勤してしまうから」というのが、医師会からの危惧の1つでありました。どうやって複数のそういった先生が学校に存在するようになるかというのは、教育委員会と相談しながら、それからコーディネーター講習を、1回ではなくて毎年行うとか、いろんなことでやっていかないと駄目だというような意見も出ています。これもやはり小児総合医療センターと連携していかないといけません。またその小児総合医療センターの心の部門が、満員で破たんしているという状況なのですね。一次・二次・三次連携を、救急だけではなくて心の部門でも作らなければいけないというような考えになってございます。二次・一次を育てるという点では、小児総合医療センターも非常に積極的ですので、この地域でうまくいけば、いろんな地域でそれを広めていけるということで、かなり本腰を入れて協力してくれるということなので、年に2回とかそういうぐらいのペースでできるかなというふうには考えています。

坂田教育長：ありがとうございます。今は小保内先生からは戦略的な人事配置、それとあとは戦略的な人材育成、まさに年間数回にわたってしっかりと育成をしていくというような、これもシステムを教育委員会が作らなければいけないというような、今はお話をいただきました。学校側も努力をしなければいけないけども、教育委員会も努力をするということですね。まさにこれは地域づくりをご専門に研究されてきた職務代理、いかがでしょうか。今の教育と医療の連携については、恐らく今まで全国的になかった事例だと思うのですが、ご所見があればお願いいたします。

宮川教育長職務代理：先生のお話をお聞きしていて、「やっぱり失敗したな」ともう一度確認できました。専門家がいる前でごめんなさい、不登校問題について臨床心理士の有資格者を学校に入れるという仕事をやってきた経験があります。学校には、子供を評価する人しかいません。だから、スクールカウンセラーというのは、評価しない人だということでは

す。だけど、どれもこれもパーツで終わってしまっていて、部分で終わってしまっています。また例を引けば、ここ 10 年来特別支援教育ということで、また学校には特別支援教育法でないと駄目だとか、それ以前はやはり生徒の非行問題があるときには、そういう不登校やいじめ、そういった問題を絡めて、そういう問題を解決するための地域コーディネーターみたいなものを置こうとして、いろんなことが失敗に終わってきています。もう 1 つ例を挙げれば、例えばこのまちも食育ということに力を入れています。だけど、これも食育という考え方だとかありますけれども、本当は 1 番届けたい所に届かない仕組みになっていると思います。言いたいことは分かっていただけだと思うのですが、そういうことをしていくには、小保内先生から「こういうすごい取り組みがあるのだ」というので今気付かされました。やっぱり個々のパーツになっているいろんな仕組みを、これは 1 つの資源ですから、これをどうやって 1 つにシステムアップしていくのかということかなと思うのですね。それは本当に着手しなければならないことだと思います。そんな感想です。

坂田教育長：ありがとうございます。今はある意味では施策が点で終わってしまっていて、線・面に広がっていないということです。これを線・面に広げられるようなシステムを作っていくことによって、この 1 つの施策が 10 倍にも 20 倍にも効果が出てくるだろうというようなご提案であったように、私は理解したのですが、このことについて、小保内先生、どうでしょうか。

小保内小児科部長：そうですね。今は確かにいろんな所でいろんなことをやっていますが、ボンと爆発しておしまいというようなのが多いのです。そうではなくて、大きな爆発をする必要はないけれども常に動いているという、そういったものを作らないといけないと思います。

こういうのをやる時に 1 番重要なのは、最もシンプルに作って拡張性と汎用性を持たせるということが 1 番大切だと、僕は思っています。そうしないと、ものすごいダイヤモンドがいて、それをボンとやったら、そのときはできたけど、後はできなくなったというのが 1 番困るのです。だから、最もシンプルにやって、他から見たら別に大したことをやっていないではないかというようなものであるけれども、継続性と継続力を皆が持つ「これならできるよね」と思えるもので継続をして、そして、拡張性と汎用性を持たせて発展させていくということです。だから、1 番最初はシンプルにいきたいと、できるだけシンプルにしたいと思います。

坂田教育長：今のお話は、非常に示唆に富みますね。シンプルで拡張性・汎用性の余地を残しておくべきであるということです。どうしてもわれわれは複雑に組み合わせたくなるのですけれども、なるべくシンプルに分かりやすく簡単に、そういうシステムをまずは作っておくということですね。これはまさに今の教医協というものは、そういうようなスタンスで取り組んでいるというふうに思うのですが。私からも 1 点、小保内先生には大変失礼になるかもしれないのですが、私がこのプロジェクトで抱える最大の課題は、学校医の

専門性だと思っています。

小保内小児科部長：そうです。

坂田教育長：そこをどう担保するか。学校の先生が、実は不登校のことについて「もしかしたら、この子は医療的なニーズがあるのではないかしら」と思って相談をしたけれども、「僕は内科医だから分かりません」というふうに言われてしまったら、これは相談というものが全く成立しない、ここはどうでしょうか。

小保内小児科部長：これはやはり卒後教育というものを徹底して、僕らがやっていくということが重要になります。学校の先生のコーディネーター養成と同時に学校医のブラッシュアップをしていかないと、これは絶対に駄目です。ですから、これもポイントになります。これに関しては、都立総合医療センターのプロジェクトの中に入れてもらうと同時に、東京都医師会の方からも支援をしてもらえるようなお話を今進めているところです。

坂田教育長：ありがとうございます。ということは、このキャリアアップについては、やっぱり医療の専門家にお任せをして、われわれはそれを信じながら、一定程度先ほど小保内先生からモデルケースでやっていきたいというようなお話も、われわれの中でもこれを共通で理解をしているのですけども。そういう中で歩きながら育っていく所もきつとあると、私は思います。市長、いかがでしょうか。今までの議論を聞いて、ちょっとまとめさせていただきます。学校は、コーディネーター育成であったり、管理職に知識を与える、こういうものを進めていく責任があります。教育委員会は、システム作りという責任があります。また医療については育成、まさに卒後教育というような、研修というような責任があります。今度は市の方にはどういう責任があるかという、やはり若干財政的な裏付けが必要かと私は思うのです。ない袖は振れないという所はあるかもしれませんが、全くのこれは財政的な裏付けなしでは進むものではないと思うのですが。市長、そこも含めてちょっとコメントをいただければと思うのですが、いかがでしょうか。

渋谷市長：いや、今日はG7が開かれているけども、このいわゆる伊勢神宮はやっぱり誰かがいるわけではないですか。しかし、あそこに行くと、西行の言うように「何事のおはしますをば知らねども かたじけなさに涙こぼるる」、やっぱり「誰かがいつも」というのでは、習近平とかそんなようなことになってしまいます。

そういう本当に土俵を作って、それでルールを作って、誰もが見やすいというそういうものであれば、全員参加みたいな、観客も含めて参加していくというようなことを作り上げていくことになるだろうと思います。それが本当の伝統であり歴史でありといった、しっかり積み重ねていくということ、継続していくということが、世界の中では、そういうことにおいて1番日本が優れていると思うのです。今またこうした不登校の人たちに対して、こうしたチームを組むということは、非常にうれしい話だと思います。予算が多少掛かっても、これは何としても捻出しなければならないと思います。

宮川教育長職務代理：いいですか。

坂田教育長：どうぞ。

宮川教育長職務代理：私が先ほど幾つかの例を挙げた理由は、やっぱり行政というのは、スクラップアンドビルドという、スクラップする所をちゃんとしていかないといけないと思います。過去の仕事の経験から、例えば精神科医の方々がこういった課題の解決に協力しようとして、学校医のような動きを東京都の医師会の方々も動かされましたよね。特に台東区辺りで進められていたと思うのですが、こういうふうに単発で終わってしまう所をちゃんと何かとしないと、やっぱり無駄遣いが生じるのだと思うのですね。あるいは、逆にそれを自分で良きものとして、いわゆるそういうことで仕事を求める人の部分になってくる可能性もあります。だから、そういう意味では、今こういう新しい仕組みを提案していただいているわけですから、そうするとそれをやるためには、やっぱりどこかをスクラップしなくてはなりません。それは清瀬市だけでできることではないと思うのですよ。やっぱり東京都教育委員会という東京都の教育行政でもちゃんとやらしてもらわないと、これもまた部分で終わってしまうのではないかというふうに私は考えているのですが、考え過ぎでしょうか。

坂田教育長：確かにそうだと思います。私は司会という立場であんまり意見を言ってしまうと、まずいかもしれないですけどね。やはり学校というのは、やった方がいいことが非常に多いのですね。やるべきことというの、もちろんたくさんありますし、やった方がいいことというのは、たくさんあるのですけども。やらなくていいことと、やらない方がいいことというのは、学校は非常に少ない組織なのです。ところが、やった方がいいことがすごく膨れ上がってきて、やらなくてはいけないこと、さっき市長もちょっとおっしゃいましたけども、子供と向き合ったり、しっかり子供のために時間を使ったり、教材研究をしたりという、やらなければいけないことが膨らみ過ぎて圧迫されてしまっているのです。だから、これを私は本末転倒だと思っているのです。ですから、やった方がいいことを精査していく必要があると、私は思っています。それによって、本当にやらなければいけないことをちゃんと確保した上で、こちらをやっていくという考え方を教育委員会は持たないと、次から次へと学校に責任が降り掛かってきます。私は、これは逆の効果になってくるかなと思っています。

植松委員：そのとおりだと思います。ただ、学校医になったドクターは、例えば5年間で書き換えとかチェックが入りますよね。臨床心理士は5年でチェックが入るのですよ。そんなふうに、学校医になった医師は、学校医という看板を掲げたときに、そういう書き換えとかチェックとかというのが入らないのでしょうかね。

小保内小児科部長：それは医師会がやる所で、実は今僕らの目から見て不適切と言っては失礼ですけども、そういう方がいて、それに対して「学校医を外すべきではないか」というような勧告とか意見は述べさせていただいています。医師会の中では、やはり地域の同じテーブルに着くので、なかなか言いづらいという所がありますので、それは地域中核病院である僕らが「学校医から来た報告はあまりにもずさんである」とか、「レベルが低い」というようなことは、医師会にフィードバックをしています。これはとても必要なこ

とで、これをやらないと駄目です。

坂田教育長：ありがとうございました。それでは、先ほど座長である市長からも、力強い言葉をいただきました。これは積極的に展開をしていくべきであるというお言葉をいただきましたので、この総合教育会議としても、この医療との連携については、ぜひ前向きに全国のパイロットモデルとなるよう進めていくということで合意をいただけますでしょうか。よろしいですか。

会場：はい。

坂田教育長：どうもありがとうございました。小保内先生、ありがとうございました。

会場：(拍手)

渋谷市長：小保内先生、結局脳の発達とかが原因で精神的に問題が発生してくるというようなことが分析できるようになったというのは、この新法も関わっているということですか。

小保内小児科部長：はい、そういうふうな所も大きいです。ですから、今までデータとして出せない、つまりかなり曖昧な環境によりとかいろんなものがあるのですが、そういったものがあって、いわゆるすっきりとしたことが言えなかったものが、いろいろな検査技術の進歩によって、そういったことが分かるようになり、適切な治療ができるものもできるようになったという所に大きなポイントがあります。

坂田教育長：では、小保内先生、どうもありがとうございました。もう一度拍手を、ありがとうございました。よろしく願いいたします。

会場：(拍手)

坂田教育長：小保内先生はこれでご退室されますけれども、続きまして 2 つ目の議題に入りたいというふうに思います。学校支援地域本部の齊藤コーディネーター、清瀬第三小学校のコーディネーターでいらっしゃいます齊藤さんに来ていただきました。先ほどお話ししましたように、学校支援本部というのは、今までの PTA とは若干違うようです。PTA は在籍している保護者と教員との協議体なのですが、そこに地域の人材が入ってきています。地域のいろんな方々のスキルと専門性を学校に寄せて、それを子供たちの教育活動に生かしていくという、これも非常に先進的な取り組みでございます。そこをパイロット的にやっただけでいるのが、今の清瀬第三小学校です。これを将来的には全校展開していきたいと教育委員会は考えています。ちょっとその実態について、齊藤さんと茂木さんからお話をいただきたいと思いますのでお聞き下さい。どうぞ。

齊藤：齊藤しのぶと申します。まず、自己紹介をさせて下さい。私には子供が 2 人おります。今は中学校 2 年生の息子と、高校 2 年生の娘がおります。高校 2 年生の娘が小学校 2 年生のときから PTA 活動に関わっておりまして、今年で 10 年目に入ります。下の息子が小学校を卒業したときに、小学校の前校長から声が掛かりまして、「今度支援本部というものを作ってみないか」というふうに言われました。昨年度より立ち上げたという次第でございます。ちょっと座らせていただきます。

こちらにレジュメの方を作ってまいりましたので、手書きで申し訳ないのですが、こちらに沿ってご説明させていただきます。

清瀬第三小学校支援本部の作り方、1年目にできた学校と地域をつないだ教育活動、ボランティア活動を体験、成果、次年度に向けてです。

清瀬第三小学校支援本部の作り方です。清瀬第三小学校支援本部の役割は、学校と地域をつなぎ、学校の教育活動をより豊かに行うお手伝いをします。PTA と地域をつなぎ、学校を支援する活動を取りまとめます。それにより学校を支援したい人は、支援本部を窓口として手伝う活動を行うことができます。学校は協力してくれる人を、支援本部を窓口として得ることができます。

清瀬第三小学校支援本部の組織です。事務局として学校支援本部コーディネーターが1人、事務局メンバーが4人で構成されております。事務局会が月に1回程度開かれております。各ボランティア活動やイベント等の推進とまとめ役をしております。学年の先生から依頼があった内容について、事務局会で計画・人材・施設の確保について具体的に進めて、提案をいたします。

各ボランティアについてです。各活動のボランティアの構成メンバーは、保護者・卒業生の保護者等地域の方々で構成をしております。各ボランティアを対象に、ボランティア総会を行っております。今日の午前中もボランティア総会を行ってまいりました。

ボランティアの方は7つあります。各ボランティア内にリーダーを置きまして、事務局と学校と連携して活動をしております。

ボランティアの取りまとめです。「図書お話し隊」、「美化」、「漢字検定」、「サタデーサークル」、「ワイワイ広場」、「見守り隊パトロール」の6つが活動をしております。PTA から移行したものや、学校と協力して取りまとめをしております。

ボランティアさんの募集です。3月に卒業生の保護者に向けて、4月保護者会全体会で全保護者に案内を配布します。地域の方々には、毎月の円卓会議で呼び掛けを行いました。去年のことなのですけれども、現在まで96名のボランティア登録がございます。

活動場所と時間と報告についてです。活動場所は、原則として学校内です。活動時間は、内容によってさまざまです。ボランティア通信を、学期に1回事務局で作成し発行しております。ボランティア通信の方は資料として、黄色い紙で配らせていただいております。

1年目にできた学校と地域をつないだ教育活動です。俳句お便り便。校内を見ていたら、4年生の教室の廊下に絵手紙のような俳句が貼ってありました。4年生は認知症サポーター講座を受けています。もう少し高齢者の方々をつなげていくことはできないかと考えました。社会福祉協議会のご紹介で、介護老人保健施設たけおかに、4年生の俳句を展示していただけるようになりました。施設にいる高齢者の方々が、子供たちの俳句の前で目を細めて見て下さり、絵に見入ったり俳句の文にクスッと笑ったりされているようです。

出前エーサー。運動会のエーサーを地域に出前に行くことはできないかと、学校から相談がありました。このような流れで、介護老人保健施設たけおかと、清瀬療護園でエーサー



一出前を実現することができました。療護園の職員の方に伺いましたら、施設で暮らしている人たちは、外に出ることが少なくなるようで、引きこもりがちになるようです。外から訪ねていくということは、大歓迎だそうです。療護園からも、「この支援本部の活動は興味がある」とお話をされ、施設の方から「障害を持っている人たちに対する、小学生向けプログラムを考えている」と伺いました。例えば食事にとろみを付けて食べさせることや、車いすの使い方など、これからまた新たな交流が始まると思います。

小中交流。三小は二中学区となります。6年生だったお兄さんやお姉さんが、中学生になると急に大人っぽくなったり、一緒に遊べなくなったりします。「中学校ってどんな所」、「中学生になると、どんなふうになるのかな」、中学校を身近に感じてくれるようなことをできないかと考えました。職場体験で頑張っている先輩方が一生懸命に書いた壁新聞を二中よりお借りして、三小に展示するようになりました。「ようこそ先輩」を企画中です。地域の方々の発掘にもつながり、三小を卒業した子供たちの保護者からの多くの協力を得ることができそうです。「お役に立てるのですね」と喜んで引き受けて下さる方が多いです。

ボランティア活動を開店、図書ボランティアとお話し隊ボランティアですね。お話し隊ボランティアの写真があります。お話し隊ボランティアの方は、学期に1回お話し会を開いております。毎回メンバーとしては10名ぐらいで行っているのですが、図書室に100名を超える子供たちが集まって、本当に楽しみに子供たちが聞いてくれているので、私達も頑張ってやっております。

美化ボランティア、こちらの美化ボランティアの方は、PTAの地区委員会が主催した草取り活動の方に支援本部として協力をいたしております。当日は本当に多くの240名ほどの参加がございました。あとは故障した扇風機の方を外して払う作業をいたしました。

見守り隊です。この日は1年生の交通安全教室で、地域の道路を歩くお手伝いをしました。

毎月1回見守り活動後に学校に集まって、気付いたことなどを連絡し合います。地域で手伝っていただく方が増えました。

漢字検定ボランティア、学校で行う漢字検定のお手伝いです。学校で勉強ができると好評です。

サタデーサークル、こちらの方は地域の方にスタッフとして参加していただいております。子供たちがとてもいろいろな経験ができるので、ドッチボールですとか、あとは世界の言葉で遊ぼう、あとは囲碁の教室も始まりました。あとは絵画、昔遊びなどの教室もあります。今年度からミニ四駆を組み立てて遊ぶようなこともやってみたいというふうに考えております。

ワイワイ広場実行委員会、こちらの方は地域の方と三小の子供たち・保護者とつないでいくことができないかというふうに考えまして、「ワイワイ広場」というものを立ち上げました。こちらの方はおとしから始めたのですが、地域の方々が竹とんぼを作って下さったり、あとは青少年委員の方々のご協力をいただいております。あとはお母様方が最

後に子供たちに豚汁を作って最後に皆で食べたりして楽しく過ごしております。

成果と次年度に向けてです。全体を通して今まで個々にやってきた活動を、一緒に行うことが増えました。PTA と地域が互いに学校に協力していくことが分かりました。

PTA に関しては、PTA 役員の仕事を少しではありますけれども、減らすことができました。役員や委員でなくても協力したいという方が増えてきました。

地域に関してです。学校の活動を地域でも見られることが増えてうれしいと喜ばれました。ボランティアを申し出て下さる地域の協力者が増えました。

学校に関しては、「地域の力を借りて行う活動に窓口ができて助かる」と先生方から言われました。本年度は 4 年生の歓迎式、高齢者と仲良くするまちづくりに大きく関わることができました。

次年度に向けては、東京都全体の学校支援コーディネーター研修会に参加し、他の地域の活動の様子を学んで参考にしたいと思っています。年度末には、本年度お世話になった各ボランティアさんやイベントの協力者・施設にお礼状を作成して、次年度の活動につなげていきたいと思っています。年度初めに各学年に大きく時間を設定していただき、学年の時間に沿った形で新たな視点ができないか探っていきたいと思っています。

あとは男性の人材の確保、これは多分今年使います。

あとは三小版サマースクール、こちらの方も今年度新たに計画として着々と進んでおります。本当に支援本部が立ち上がって、事務局メンバーのできる範囲の中でやっております。共働きの方とか、一人親の方など、さまざまな家庭が増えております。PTA 活動の方もそれによって難しい中、できる人が、できることを、できる範囲でやっていくということも必要かと感じています。

次ですけれども、「ようこそ先輩」のことについてお話をさせていただきたいと思っています。こちらの小さな紙の方もお配りさせていただいておりますけれども、『「ようこそ先輩」に来て下さった職業の方々について』ということで、お手元にあると思います。2 日間にわたって行ったのですが、30 名を超えるゲストスピーカーの方々にお越しいただいて、本当に当日は大成功に終わっております。

4 年生の子供たちは今年 10 歳になります。成人の半分ということで、2 分の 1 成人式を行う予定です。

この機会に自分の将来を考え、また今まで自分をいろいろな場面で支えて下さっている方々のことを知ることも、1 つの学習と考えております。ということで、4 年生の先生方から依頼を受けました。

コーディネーターと事務局の方で人材の確保を行いましたけれども、普段行かないような商工会に行ったり、青年会議所にもお願いしたり、あとはこちらの市役所の産業振興課の方々から農業委員会の方を紹介していただいたり、本当にたくさんの方々に来ていただいて、三小の子供たちと一緒に触れ合っただけでよかったことがありました。本当にこれは私たち事務局にとっても、すごく自信になった 1 つの活動だと思っています。

平成28年度より新たな取り組みを始めます。三小サマースクールの計画をしております。こちらは、1学期は7月20日が終業式です。その次と次の21日と22日にサマースクールを計画しております。メインで来ていただける方が決まっております、清瀬市出身のペーパークラフト作家の太田隆司さんに来ていただけることになりました。太田さんの作品を紹介していただいたり、太田さんが直接子供たちと一緒に作ったりいろいろして下さるので、とても楽しみにしております。

あとは国際理解授業についても、市内で活動している清瀬国際交流会さんの方とつないで、5年生の授業の所でやっていただけるようになりました。こちらの清瀬国際交流会さんの方は、先ほどご紹介いたしましたサタデーサークルの方の1つのブースということで、去年から指導していただいているのですけれども、そちらのつながりで、また本年度もということになりました。

3年生はモンシロチョウの観察、こちらは産業振興課からご紹介をいただいて、キャベツ畑を作って、そこでということになっております。他の学年からの依頼の方も、たくさん今いただいているというところです。

4番としまして、事務局会員の動きと、あとは支援ごとのコーディネーターの動きということをお話しさせていただきます。こちらの大きな紙の方をご覧ください、こちらの方が、保護者の皆さまですとか、卒業生の保護者の皆さまですとか、地域の皆さまにお配りをして、こちらの活動に参加して登録して下さいということです。登録用紙がありますけれども、こちらを学校に出していただくと登録ということになりまして、活動していただけるということになっております。裏面に三小の学校支援本部を中心とした組織図がございます。皆さんの方からいろんなことがつながっていくということで、分かりやすい組織図になっていると思います。

昨年度の成果ということですが、ボランティアとして学校に関わる市民の方がとても増えました。ワイワイ広場では約30名の方が、三小の円卓会議、あとは七小の円卓会議や清瀬国際交流会さん、青少年委員の皆さま、あとは青少年問題協議会の委員さんも活動してくれました。常にボランティアの活動をしていただける方が約30名おります。授業のボランティアも、約30名にご協力をいただきました。ボランティア総会の方も、年に2回実施いたしました。学校支援本部があることで、教育における地域連携が拡大したと思います。4年生が俳句作品と、エーサーを、地域の高齢者施設と交流いたしました。こちらは、支援本部に施設を紹介してもらったということです。4年生の総合の「ようこそ先輩の授業」を、本当に多様な職業人の方を招いて実施することができました。支援本部としましては、職業人の紹介、ご案内、運営の協力もしました。市民への周知も広がったと思います。

去年の私の体験主張発表会の方でプレゼンすることによって、幾多の方々から知っていただくことができたと思っています。

最後にこれからの課題ということなのですが、清瀬市内の小中学校に広めていく

にはどうしたらいいのかというふうに、事務局のメンバーもそうですけれども、私もさまざま考えて、こんな感じなのかなということを出させていただいております。学校管理者、校長先生、副校長先生に、学校支援本部やコーディネーターの役割をご理解いただくということです。あとは校長先生、副校長先生が理解していても、職員の先生方がご理解いただかないと、そこがなかなかうまくいかないことかなと思っております。もし広めるのであれば、校長会ですとか副校長会に出向いてお話をすることも必要なのかなというふうに思っています。あと地域と保護者への広報活動をもっともっと充実させることによって、より協力を得られると思っております。あとはコーディネーターの方や事務局員になられる方々の人材の発掘も、大事なことかなと思っております。コーディネーターと事務局の方々は、有償ボランティアとして活動できればいいなというふうに考えております。理由としましては、ボランティア以上の活動をしております。PTA 活動ではない、またちょっと別の活動ということで、今もひしひしと感じているのでけれども。例えば授業の組み立ての中に一緒に入って企画に参加もいたしますので、そのことが PTA 活動とも違った感じかなと思っております。依頼があった内容について、その方と打合せに出向いたり会議も開いたりしますので、こちらの方は大変だと思います。コーディネーターの位置付けを明確にしてほしいということも考えております。他の支援本部の見学や研修にも、どんどん参加していきたいと思っております。すみません、私からの説明は以上です。

会場：(拍手)

坂田教育長：ありがとうございます。齊藤さんには、無理を申し上げて今日来ていただいておりますので、本当にありがとうございました。

渋谷市長：新しい NPO が誕生したかと、そういう思いですね。

坂田教育長：本当にそうですね。将来的には NPO 法人を立ち上げてもらいたいですね。ありがとうございます。市長の時間が 3 時ぎりぎりなものですので、簡単に一言ずつご意見を頂戴できればというふうに思うのですが、今度は宮川先生からお願いいたします。

宮川教育長職務代理：先ほどの小保内先生のお話を聞きながら、実は齊藤さんのお話をもっと早めに聞きたいなという思いがあったのですね。小保内先生が進められているあのプロジェクトは、やっぱり具体化していくことが本当に期待されますよね。けども、一方で本当に歴史的な PTA というものが機能しなくなって、その PTA によってどれだけ子供たちや大人たちが救われてきていたかということを見ると、失ったものはすごく大きいですね。なぜ齊藤さんのお話をお聞きしたかったかという理由が 2 つあって、1 つはやっぱりそういう人が人として生きていくようなふうなまちをつくるには、やっぱり人と人のつながりをどうつくっていくかということしかないと思うのですよね。それで成功しているまちがあります。島根県の海士町という、漢字の「海」に「士」という、それで海士町と読ませるのですけど。これは島根県にある小さな島ですけど、20~30 年後には人口がどうなるだろうと言われていたのですが、ここが今はたくさん移住してくる方がいて、新しい仕事とか新しい文化が作り出されているということです。それがどうやってできた

かという、基本的には人と人をつなげる、そういう役割の人がいるということ、そういう人が入ってできたことなのですね。だから、齊藤さんがこれからどういう生き方をし  
て下さるのかということが、新しいモデルを作ってくれるのではないかなと思っています。  
けど、齊藤さんもお若くてお元気ですから、これから 20 年・30 年どころか 60 年も 70  
年も活躍されると思うのですが、その間につなぎ手をどうやって増やしていくかという  
ことだと思います。

本当にたくさんの方がつなぎ手になったならば、これまでにないような日本の文化とい  
うのできるのではないかというふうに思います。だから、そういう意味では、新しい日  
本の文化をつくっていくような基盤になるのが、この学校支援本部という中に隠されてい  
るのかなというのが 1 つあります。実は齊藤さんを大好きになってしまったのは、実は私  
に頼まれたのですよ、先ほどご紹介のあった何でしたか。

齊藤さん：ようこそ先輩。

宮川教育長職務代理：ようこそ先輩。私では絶対に駄目だろうと思って、若くていろいろ  
やっている教授に声をかけたのですね。私も拝見しました。そのときに私が驚いたこと  
をお話ししたいのですが。清瀬にはこれほどに産業とか農業とか、そして、あれほどの市  
民活動のことを紹介するいろんなものがありながら、知らない人がたくさんいるのだとい  
うことです。私もその 1 人ですけど、そういう知らないことをつないでいく人が必要です。  
だから、第三小学校の支援本部は、そういうことを実現できています。だから、新しい文  
化づくりをしているのだなと思います。そして、1 人 1 人がそうやって清瀬のいい所とか可  
能性を知ることによって、このまちに対する肯定感とか、このまちにこれからも住み続け  
たい、もっといいまちにしたいという人が生まれてくる、それが私が言っている文化づく  
りだと思うのですよね。だから、これをやはりさらに続けてもらいたいと思っています。

もう 1 つは、齊藤さんのご説明の中で円卓会議というお話が出てきたのですが、円卓  
会議との関係について今どういう動きをされているのか、これが 1 つのモデルになるの  
ではないかなと思っています。長くなって、すみませんでした。

坂田教育長：円卓会議は地域支援、今のところは学校支援本部は学校支援だけで、それが  
融合していったりすることも将来的には可能なのではないかと思います。

宮川教育長職務代理：それもありますね。

坂田教育長：そういう選択肢もあるのではないかという話だと思います。ありがとうございます。  
一言ずつお願いします。

稲田委員：すてきな話をありがとうございました。ちょっとだけ危惧したことがあります。  
PTA 活動というのが今まであって、PTA 活動がかなりの部分を今までやってきたと思  
います。私も PTA の会長などをやった経緯がありますので、中学などでやってきましたの  
で、すごく分かるのですが。すごく大変な仕事で、やっぱり地域に入っていかなければなら  
ないという意味では、そこと支援本部と一緒に動いていく部分もあれば、全然違った動  
きをしなければならぬ部分もあって、PTA との関係性とか、そういうものをどうやって、

人との関係なので、そこが競合しなければいいとか、PTA をなくしますというふうな学校が出てきても困るなというのが、ちょっとだけ心配なこととして浮かびました。

坂田教育長：そのあたりを、どうお考えでしょうか。

齊藤：PTA との関係ですけれども、去年支援本部が立ち上がったことによって、保護者の皆さまも「支援本部って、いったい何だろう」というふう考えたのですね。私もいろんな所に行ってお話をしたり、活動の実績を見ていただいて判断をしていただいたりしております。PTA の会長さんとも定期的に会って、「この部分は手伝いましょうか」とか、向こうの PTA の方々からも「この部分を手伝ってほしい」とか、そんなふうに意見交換をする場を作っていただいています。実はまた年度が変わりましたので、うちの場合は校長先生も変わりましたので、校長先生が「では、顔合わせをしよう」ということで、支援本部と PTA の皆さまと顔合わせの場を作っていただいておりますので、その部分はうまく両方が遠慮せずにやっていければいいのかなと思います。正直言って、まだまだ模索中です。

坂田教育長：きっと、これから成熟されていくのだらうと思います。では、先生の方から、すみません、一言お願いします。

稲田委員：素晴らしい活動をやられていると思います。PTA との関係で今話があったのですが、学校が 1 番苦勞するのは、PTA の役員を決めることと、クラスの役員を決めるというのが、学校にとっては最大の部分です。ある程度 PTA の役員の仕事というのを分散して行って引き受けやすいようにするためにも、支援本部というのがあってもいいのではないかという気がします。そういう意味で、その辺りの感じというものもやってみただけならば、恐らく既に PTA がやっていたことをもらってやっつけようと思っております。その辺りを PTA の会長さんとか役員さんと話をし、「片方はやめましょうよ」ということにならないように、両方が両輪として学校を支えて応援していくという状態になってほしいと思います。もう 1 点は、小学校ですから、おじいさんやおばあさんはお時間があると思いますので、おじいさんやおばあさんをどうやって引っ張り出すかという作戦も必要かなと感じております。

齊藤：そうですね、ありがとうございます。

坂田教育長：おじいさんやおばあさんの件については、何か作戦はありますか。

齊藤：円卓会議の方々もちょっと高齢の方もいらっしゃるのですが、その方々も先ほどのワイワイ広場のビジターとして参加して子供たちと交流もしております。支援本部が窓口になっていることで、やっぱりそういう方々がすぐ入りやすいということが、去年やってそこが 1 番大きなことかなと思います。前はなかなかそういうことができなかったもので、ここを通せばすぐに三小の子供たちと触れ合える、そういうことかなと思っていました。

坂田教育長：ありがとうございます。それでは、私も一言申し上げます。今齊藤さんがお話しになられたことはすごく大事で、実は学校を支援したい人というのはたくさんいるのです。例えばお父さんもその学校を出たとか、おじいちゃんも出たとかいう卒業生の方

もたくさんいますけれども、そういう方々は本当は支援したいのですね。ところがそのチャンネルがありません。学校に「私はこういうことができるのだけど、何かないですか。」とはなかなか言えないのですね。学校支援本部があると、そこをつないでくれるのです。だから、本当に地域のパワーを集めていく窓口になって下さっています。それと同時に、本市は「手をつなぎ心をつむぐみどりの清瀬」なのですね。まさに手をつなぎ心をつむぐ中核基地になっていらっしゃるというところで、教育委員会としてはこの施策を本当に進めていきたいというふうに思っております。ここでは言質を取る所まではしませんが、財政的な支援もやはりここは若干ですが必要なのです。今は無償ボランティアでやっていただいています。全くありません。全くのボランティアなのですね。郵便切手であったり、もしくは活動される方々の保険であったり、やっぱり私はそれは行政の責任ではないかというふうに思っています。教育委員会としてこれは財政の要求はさせていただきたいというふうに思いますが、いかがでしょうか、市長。

稲田委員：それに補足して、私の所はデイサービスをやっているのです。今はそこにもう10何年になるのですけれども、はじめから来ている所は「これだけは欲しい」というボランティアで、「要らない」と言った所は来ないのですよ。途中でやめてしまいます。遠慮して「これだけは有償でできませんか。」という要求を付けた所に「いいでしょう」と言ってやってやると、ずっと続くのです。これは「ボランティアをしながら、最低限度時間給で幾ら下さい」とか、そういうことではないですよ。「こういうのはどうしても必要だから、この分に対しては頂きたいのですけど、いいですか。」と言ったら、それは「いい」と言うところからずっと続いているというのが、例としてあるものですから。ボランティア、イコール無償という考え方をしてしまうと、ボランティアは続かないと、僕は思います。

坂田教育長：継続性という意味ですね。

稲田委員：継続性です。

坂田教育長：この議論を、もしくは齊藤さんのプレゼンを聞いて、市長のご返答をいただければうれしいのですが。

渋谷市長：助成をしていくのには、それなりの体制がないと駄目でしょう。NPO法人とかそういう形にしていってもらえれば、やりやすくなります。

宮川教育長職務代理：いきなりはなかなかだとは思いますが、自立性というのはやっぱり大事だと思いますね。

坂田教育長：そうですね。ですから保険料であったり、もしくは費用弁償的なものであっていいと思うのですね。多額の財源は、私は必要ないと思っています。今のお話ではないですけど、逆にまた時給でやるようなお仕事でもないと思います。私はそこは一定程度の財源は、教育委員会としてはやはり必要かと思っています。

渋谷市長：財源で今日は午前中にもものすごくうれしい話がありまして、そういう人がまた現れてきてくれたかということです。遺言をちゃんと書いてくれて、年齢が80歳か90歳で100万円を行政に寄付しますと、行政にお世話になりましたと、今日その報告があり

ました。伊藤ヨシさんは 30 億円とか 40 億円だけど、「そういう人が現れてくれ」などと言っても、そう簡単ではないけど。でも、100 万円といってもとんでもない金額で、伊藤ヨシさんの的には全く不可能の金額でもありませんが。本当に感じて、清瀬に生きている間にお世話になったという気持ちの人が増えていけば、少しずつ広がって行って、「少しぐらい遺産をお渡ししよう」などという人が出てきてくれると、こういう活動をそういうので支援していけると思います。だって、「清瀬に住んでいて、うれしかった」という気持ちを、そういうことに寄付するわけですから、そういう気持ちを育てる清瀬の部分に、そういうお金を使っていくということです。

坂田教育長：ありがとうございます。

宮川教育長職務代理：教育長、一言いいですか。

坂田教育長：はい、どうぞ。

宮川教育長職務代理：やっぱりもう 1 つ気になっているのは、支援本部と円卓会議のすみ分けです。特に円卓会議をちょっとのぞかせていただくと、今齊藤さんからもちょっとお話があったように高齢の方々に、高齢の方々が健康で過ごす上でも、こういう活動というのはとても大事だと思うのですね。だから、稲田委員からあったように、やっぱりそういう有償である部分だとか、それから例えば NPO 法人にしたときに、やっぱりある程度自前で稼げる、例えば学校だってただで頼むのではなくて、何かそこである程度のやりとりが生まれる。そういう所にもっと創造性だとか、それからやっぱり組織として、こういう齋藤さんの所のそういうものをもっと機能していくとか、そういう所で逆に行政として何か制度的な部分、お金の面だけではなくて、何か支障になっている部分はないのかどうか。例えば学校だって、何か買いたいときにすぐにお金が出ないとよく言われるではないですか。だから、そういう所で何か手立てはないのかなということ。もしあったら、そういうのを解決していくことだと思うし、円卓会議とのすみ分けというか、あるいはそこをどういうふうな 1 つのものにしていくのかというのは、ある程度プログラム化して解決していかなと、いずれかどちらかは消えるのではないですかね。

坂田教育長：ありがとうございました。時間が迫ってしまいました。あつという間の 1 時間半でした。

渋谷市長：2 つとも、うれしい話ですよ。

坂田教育長：私もそう思います。今日は市長に聞いていただけたのは、総合教育会議の 1 番の趣旨であったのではないかというふうに思います。ちょっとまとめさせていただきますと、教育委員会と市長部局が、やはり地域の協働というものを、手をつなぎ心をつむぐ緑の清瀬を、連携して取り組んでいこうということが、今日は確認されたと思われま。そういう中でも、学校支援本部の取り組みというものが、これは 1 つの新しいモデルになっていくかと、市長もちょっとご期待をいただいたような形で、われわれ教育委員会としてもバックアップをしていきたいと思うのですが。ぜひここは、宮川委員のお話にあったように、円卓会議とのすみ分けを構造的にやっていく。構造的な問題を解決しながら、で



もやはり財源という所の辺りとしては、ご要求をさせていただくということです。

これは、教育と医療との連携についても同様でございます。これらの取り組みを積極的に進めていくというようなお話になったのではないかと思います。本当でしたら、ここで清瀬学芸員制度であったり、他にも幾つかあるのですが、今日はお時間がないので、またの機会に取り上げさせていただきたいと思います。

拙い司会ではございましたけれども、市長からの命を受けて会議を進めさせていただきました。最後に市長、お言葉を頂戴できればと思いますが、よろしく願いいたします。今日の1時間半をまとめていただければと思います。

渋谷市長：小保内先生の話は学校と行政と医療と、そして、中核病院、こういうものは日本での先進的な取り組みだということです。今の話は第二のNPOの現れだということで、JCOMにちゃんと伝えて下さい。私の取材より、そちらですよ。

坂田教育長：市長から言ってもらうのが1番強いですよ。市長も一緒に取材を受けて下さい。

渋谷市長：それぐらいに形式上今までは教育委員会に一切関わってこなかったわけですけどね。全国の教育委員会が、だいたい形式的に済ませてしまっているのだらうと思います。しかし、ここでいろいろなことで流れが変わってきているし、大村教授がノーベル賞を頂いたのも、このところずっと2000年に入ってからノーベル賞受賞者が多いわけです。今までは「日本の教育には創造性がない、創造性がない、創造性がない」と、そういうことを散々言われてきたけど、事実としてのことが積み重なってきているから、多くの日本人が気が付き始めて、こういう教育委員会についても、しっかりと本当の意味での教育委員会ということに変わっていつているだろうと、そういう感想を抱きました。

坂田教育長：本市の教育委員会は、少なくとも26市の中でも相当に進んでいると自負しているんですけど。宮川委員、いかがでしょうか。

宮川教育長職務代理：私もそう思いますし、「教育長よりも半歩先を行きたい」と言ったら、教育長が「私の方が10歩先に行く」と言いまして、そうやって協働して頑張ります。

坂田教育長：でも、本市には本当にさまざまな資源があります。宮川委員の十文字学園女子大学、もしくは本市で提携している3大学を含めまして、今ご紹介いただいたような個人でも多様なスキルをお持ちでいらっしゃると思います。もしくは医療機関、もしくは大林組とか気象衛星センターとかというような科学技術の粋を集めた機関、これらをやっぱり宝として使っていく、子供のために地域のために使っていく、これはやはり戦略が必要だと私は思っています。それが一步でも二歩でもこれで進めることができればというふうに思っていますので、今後ともよろしく願いいたします。

今日は本当にどうもありがとうございました。